
最強の能力者

夜々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強の能力者

【Nコード】

N8998L

【作者名】

夜々

【あらすじ】

日本は内部から腐敗していた。そんな日本を変えようとするも、優しいのか甘いのか、力は十分過ぎるほどあるのに、大量虐殺を用いた『革命』を成功させることが出来ず、異世界へ渡った主人公のお話。最初はシリアスな入りですが、後はそんな重くない・・・はずですw

プロローグ　そして異世界へ。

1人、また1人と・・・いや10人、また100人と人間が倒れていく。遙か彼方へと飛んでいく。

突然閃光がきらめき雷が奔ったかと思うと、炎の柱が空高く突き上がり嵐が吹き荒れ真空の刃が飛び交うここは、まさに戦場だった。

・・・あくまで見た目は、だが。

実質この戦いは、戦いなどとは到底言えない一方的な『蹂躪』だった。

たった一人の少年がこの焦土と化した不毛地帯の中心に君臨し、全方位から迫り来る、最早軍勢と言っても差し支え無いほどの数の人間を何度も何度も薙ぎ払う。

この場所で発生している超常現象も全て彼によって引き起こされていた。

「先頭、構えろ!!」

リーダーらしき人間が声を張り上げた。

瞬間、少年を囲んでいた集団の最も前にいた者達が一斉に大型銃を構えた。

頭上を飛んでいる数機のヘリからもガシャガシャと音がする。

無線でヘリの操縦者にも伝えていたらしい。

「撃て!!!!!!!!」

少年に、おびただしい数の銃弾、ミサイルが殺到する。

だが彼自身は、どう考えてもこの場にふさわしくない、余裕とともとれる表情でそれらを一瞥すると、叫んだ。

「つまんねえ……。この、ドロッドロな世界が! 嘘で満ちたこの世界が! 何もかもが、つまんねえんだよ!!」

言って、両手を広げた。

すると、まるで見えない壁に突き刺さったかのように、少年から2〜3m離れた所で全ての弾丸が停止した。

全てが止まる。

少年も、そして今まさに彼を殺さんとしていた人間も微動だにしない、いや、少年以外は身体を動かすという至極簡単なことさえも出来ない中、空中に静止していた弾丸がゆっくりと、音をたてて地面に落ちた。

「お前らみたいな、欲にまみれた人間がたまらなく鬱陶しい。どうしたらそこまで汚くなれるんだよ？ もうどうせ何をしてもお前らは変わらない、全てが無駄・・・だから俺はこの世界を・・・ぶち壊す」

少年のこの思いは、全ての日本人の心を代弁したものだといったても過言ではない。

日本は、堕ちた。そして、これからもどこまでも。

少年も日本という怪物に両親を奪われている。

もうどうしようもない、救えない。

ならばいっそ。一度、全てを壊してしまおう。

だから少年は独りで日本に宣戦布告し、今、軍と向かい合っている。

「ふ、ふん。たた、たった一人で、我らが日本に、か、勝てると、

ほ、本気でとおお思っているのかッ!？」

先のリーダーらしき人物だが、最後の方は声が半分裏返っていた。

この戦いが始まるまでは、一人の人間を殺すことなどすぐに終わると日本の上層部は思っていた。

だが現状、日本の全戦力である自衛隊全軍を総出動させるまでに追い込まれている。

この、桜を3つあしらった軍の制服をまとった、エリートである『陸将』も直々に戦場へ赴いているわけだが、流石に恐怖を隠せない。

「簡単だよ、お前らを殺すことくらいな。だが、俺はお前らとは違う。無闇に人間を殺したりはしない。たとえそれが、芯から腐りきったこの日本の飼犬が相手でもだ」

「な、何を格好つけている！ 貴様が一人でどうあがこうが、何も変わらん！ 貴様が死に、それで終わりだ！」

そしてもう一度一斉射撃指令を出す。

「何度やっても無駄だということにも気付かない・・・終わるのはお前らだ、馬鹿」

再び、銃やミサイル、果てはロケットランチャーまで火を噴いたが、少年が少し手を振っただけで超高圧電流が迸り、彼に爆風も当たらない程の距離で全て爆発した。

煙が立ち込め、あまりに衝撃が大きすぎたためか、震度2弱程ではあるが地面が揺れる。

その煙が、不自然に発生した風に全て払われると、その中から無傷の少年が姿を現した。

「なんなんだ貴様は！？　なぜ、なぜ無傷なんだ！！！！　そこまで馬鹿げた能力があつてたまるか！！！！」

「うるさい。『化物』、なんて言ってくれるなよ？　俺からしたらお前らのほうがよっぽど『化物』だ」

「貴様のような危険因子を放って置くわけにはいかん！！」

陸将はそう言い、またもや攻撃準備を始める。

「無視かよ。　ってか、いい加減に、しろ！！」

少年は右手の平を上に向けたまま前に出し、一気に力を放出した。

一際大きな音が鳴り、電撃が一瞬だけ空に昇り、すぐ消える。

少年が、自身の電撃で天然の雷を無理やり引っ張り、すぐさま天空から特大の雷が彼の頭上に落ちてきた。

亜光速の雷でも少年はかわそうと思えばかわせるわけだが、それをせずにしっかりと受ける。

そして自分自身を中継し、周囲の地面に電流を流した。

その間は僅か1秒に届くかどうか。

たったそれだけの間に数万人いた軍の人間は一人残らず無力化された。

・・・終わってみれば、随分あっけなかった、と少年は溜息をついた。

「この戦いは、おそらく日本どころか全世界に中継されてたんだろ
うな・・・」

だとしたら、こんな桁外れな力を持つ俺に帰る場所はない、と呟き、
思う。

ここまで大規模なことをしても、軍は一時的に無力になっただけで
あり、壊滅した訳ではない。

ようするに、日本それ自体は無傷。

・・・もし、全滅させられたなら。

この国は戦力を全て失い、人々に無理強いは出来なくなるのだろう。

それでも、少年には『皆殺し』を選択することが出来なかった。

「本当に俺は、甘いなあ・・・結局、人の命も奪うことができなくて全てを壊すなんて、土台、無理な話だった、か」

ここまでやって何も変わらないのなら、もう諦めるしかない。

俺の戦いは、終わりだ。

きっかけは作れたと思う。

だから次はこの国の皆が力を合わせて、救ってくれ。

「悪いな、どこかで見ている日本の皆。俺は一足先にこの国を捨てる。無責任なのは分かってるけど・・・後は、頼むよ」

そう言うと、少年は少しずつ力を解放していく。

空間が悲鳴を上げ始めた。

・・・『異世界』へと、少年は逃避する。

そして彼の姿は、消え失せた。

「・・・？　どうかした、フィーネ？」

一人の少女がフィーネに問いかけた。

茶色の髪と瞳を持つその少女は、短めの白いワンピースを着ていて、もう少しで呼び方が女性へと変わるかというくらい大人びた雰囲気を持っている。

「うーん・・・なんでもないよ、リィ。いつものことでしょ、気にしないで」

「でもさあ、いい加減教えてくれてもよくないかな？ たまにそうやって挙動不審な行動する理由！」

リイと呼ばれた少女は、見た目は大人でも本質的には全くの子供だった。

だがそれは長年の付き合いであるフィーネはとうに知っている。

ちなみに『リイ』とうのはフィーネだけが使う愛称で、他の人達は『リイラ』と呼ぶ。

「だからなんでもないって！ ほら、ちゃっちゃと歩く、歩く！」

二人は今、Aランク、高難易度のクエストを受け、その目的地へと続く整備もされていない小さな道を歩いていた。

二人にとってはそう危険なクエストではないため、大した重装備はしていない。

「普通に歩いてるじゃんか。そんな、歩いてたら急に『バツ！！！』てあらぬ方向を見たりするフィーネには言われたくないよ！」

「それだって一ヶ月に一回あるかどうかってくらいでしょ！？ 毎日とかじゃないわよ！ 人を『ちよっと危ない電波感してる人』みたいに言うな！！」

そしてフィーネは身体から火花を放ち始めた。

それは彼女が怒りを表現しているからだ、ただのギャグだ。

こちらはリィラとは反対にボーイッシュな格好で、膝下ほどのジーンズに黒いTシャツを着ているが、その火花によって服に火がつくことは無く、ましてや炎が彼女を傷つけることなどありえない。

眼は少し紅くなっている。

「んもーすぐ怒らないの。でも、実際そうでしょ？ 何か感じてることには変わらないんだから」

「いや、そうなんだけどさ・・・」

「それに私にも何も話してくれないし、こっちこそ怒りたい気分だよっ！」

「うー・・・」

「隠し事はよくない！」

フィーネには、何度も背中を預け合い助け合った、もはや親友さえ超えるほどの友人がいる。

それこそ陳腐な言い方だが『心友』という関係があるのならまさにそれだというくらいの仲だった。

その友人がリィラな訳だが、そのリィラにさえ話すことが出来ないでいた。

そう、誰にも話したことがない。

彼女が、

『世界の大きな変化や違和感を感じ取れる』

ということを。

物心ついたときにはすでにフィーネはこの不思議な能力を自らの一部として認識していた。

流石に小さい頃は何を感じているのかまでは分からなかったが、何十年も共に過ごしていたら色々なことが分かってくる。

まだ、『世界の大きな変化や違和感を感じ取れる』ということが本質なのかどうかは知るよしもないが、今のところは彼女自身それが一番しっくりきているため、自分でそう定義した。

だが、こんなこと他人に話したところで『危ないコ』とみなされてしまうのは目に見えているため、リィラにも同じ理由で話すことを躊躇っていた。

もうすでに『たまに脈絡もなく何かを感じる危ないコ』と思われるいることにも薄々気付いてはいたが。

「・・・まあ、話したくないならいいけどね？ でも今更フィーネがどんな事情持ってたって友達やめたりしないよ？」

「・・・うん、ありがとね、リィ」

こういった気遣いは少し申し訳ない気もするが、ありがたかった。

やっぱりリィは良いやつだ、とフィーネは勝手に結論づける。

それにしても。と、同時に思う。

『今日のは、大きかったな・・・多分、今までで一番はつきりしてた。それに大きな反応は、だいたい大きな戦争とかが起きて世界に大きな変化をもたらすような時にしか無いのに、今回ののは「変化」じゃなくて「違和感」だった・・・。こんなに大きな反応さえ初めてなのに、それが「違和感」だなんて、どういふことなんだろう・・・』

違和感は感じ取れてもその真意までは見抜けない自分自身に歯噛みしながら、長い息をはいた。

「ま、分からないもんをいつまで考えてても意味、ないよね!」

「ん〜? どうした〜フィーネ? またかあ?」

少しふざけ気味ではあるが、その顔を見ればフィーネを心配しているということがうかがえる。

「ううん、なんでもない。ってか、またかとはなんだまたかとは! そんなしょっちゅうじゃないでしょうが!」

そしてまた二人はいつものように任務へ出かける。

生きていく為に仕方なくしていることではあるが、そんな毎日は二人にとって確かに充実していた。

気づくと少年は森の中にいた。

星が、月が、その明かりが、僅かに見え隠れするだけの深い色合いの空間に呆然と立っている。

比較的風は凪いでいたが、時折ほんの僅かに木々が揺れる。

そんな小さな音さえも、少年には鮮明に聞こえていた。

辺りは暗く、静か。

まるで世界そのものが彼を拒絶しているかのように。

・・・だがそれもある意味では間違っていないのかもしれない。

少年はそっと目を開いた。

彼は暗闇の中においても、恐怖やその類の感情は微塵も感じていない。

恐怖というものが基本的に『死』に対するものだというのなら、彼がそんなものを感じることはないだろう。

いきなり深い森の中にいたということに、少し驚いたように目をしばたかせた後、短く息を吐き、呟いた。

「ここが、異世界か。多分間違っていないと思うけど・・・」

そして少年はゆつくりと歩きだす。

ただ漠然と、未だ見ぬ世界へと向かって。

ブログ そして異世界へ。(後書き)

えっと、文才なくてすいません W
批評受付ます。

評判がよかったら続けようと思います W
感想、超待ってます！ (批評含む)

森の中の出会い（前書き）

超展開 w

つまらないですかねー？

正直自信ないです w

なんてネガティブ！！ w w

謎ですね

森の中の出会い

ここでは、比喻ではなく本当に、静かに、そしてゆっくりと時が過ぎていく。

だからフィーネ達はこの森に入ると、いつも不思議そうにあたりを見渡してしまう。

いや正確には、二人に限らず全ての冒険者が、だが。

まだ入り口だというのに暗い。あまりに暗い。

そして視界に入る全ての存在に、動きが無い。

それはまるで侵入者を拒否し、森そのものが時を止めているかのようだった。

空気さえ動かないこの森に、二人は足を踏み入れる。

「相変わらずだね、この森は・・・」

フィーネが、どこか畏怖のこもった声色で言った。

「うん・・・誰かが特に名前をつけたわけでもなく、その特異な性質から、旅人や冒険者にはそのまんま『揺らぎの森』って呼ばれてるんだよね、確か」

そう、この森は『揺らぎの森』。

時間も空間も色も全てが『曖昧』な場所。

数年に一回のペースで全てが揺らぎ、変化する。

ただ一つ、『森であること』を除いては。

その理由も秘密も全てが不明で曖昧なため、人々は必要以上にここに留まろうとはしない。

ただの不気味な通過点としてみな過ぎ去っていく。

フィーネ達も同じように、気持ち早歩きになりながら森の中を歩いていた。

「・・・あ。ねえリイ、今、少し『揺らいだ』？」

「いやいやいや、私は普通の人間ですから。そんなもの感じることは出来な・・・あれ？」

肌にまとわりつくような雰囲気を引きずりながら二人は歩いていたが、唐突にフィーネが何かを感じたらしく、空を仰いだ。

だがそれはフィーネの特殊な体質によるものではなく、リイラも感じているようだった。

「なんか・・・少し暗くなってない・・・？」

この森では、時間や空間程の基本概念とも呼べる絶対的なものならまだしも、色合い程度なら頻繁に変化する。

言われれば、「あ、そうかも」と思う程度ではあるがフィーネの都合はその変化を見逃すことはない。

だが今回は、厳密に言うとき色合いなどではなかった。

「うん、暗く・・・っていうか、重く、なってる・・・。重力自体が、揺らいでるのかも。暗く感じたのは多分精神的なものかな。でもまさか重力が変化するなんて・・・。普通はありえない」

「重力か・・・。だよ、この森の大規模な揺らぎは何ヶ月か前に終わったし、重力ほどの大きな現象の変化はあと数年は起きないはず・・・うわ!？」

「!？」

いきなり、重力が数倍になって二人を地面に縫い付ける。

なんとか這いつくばることは逃れているものの、時間の問題と思えた。

二人は悲鳴をあげることも出来ず、ただ歯を食いしばりじっと耐える。

周囲の木々も、枝が45度ほど下の方向にになっている。

あまりの圧力に耐え切れず、半ばから真っ二つに折れるものまで出てきた。

それほど大きな力だったが、しかしそれは一瞬のことで、あっという間に正常な重力に戻る。

「は、はぁ・・・び、びっくりしたぁー！ 何、今の・・・。大丈夫、フィーネ？」

「大丈夫、だけど・・・」

と、フィーネは額の汗を拭いながら続ける。

「流石にこれはおかし過ぎる。こんな急激な変化、聞いたこともな

いよ」

「それは私もだー・・・」

二人は結構な実力者なためこの森に対してもさほど警戒はしていない、なんとかなるというスタンスで進んでいたが、ここに来て、ようやく明確な恐怖を抱いた。

「早く、出よっか。あとは今のでこの森自体が揺らいちゃって、出口が無くなった、なんてことになってないことを祈るばかりだね・・・」

「うん、分かってる。でもね、なんか・・・感じるの・・・」

「・・・こ、こわっ・・・」

「そうじゃなくて!!　・・・誰か、いるの・・・?」

何の確証も無かったが、フィーネは虚空に向かって話しかけた。

隣ではリィラが胡散臭そうな目をして親友を見つめていたが、何も起こらないことを確認すると、

「ちょっと、フィーネ？ 本当に、ただの痛いコだって、それじゃあ・・・」

「ち、違う！！ 本当に、感じるんだってば！」

必死の弁明も、リィラには届いていない。

「もう、帰ろ？ 見てらんないよ（笑）」

「うゝ。じゃ、最後にもう一回だけ・・・。誰か、いるの？ 出てこないと、燃やし尽くしちゃうよう・・・」

ダメもとで問いかけてみたが、驚くほど早く返答があった。

「うわゝ、それはちょっと嫌だなー。いくらなんでも、それは全力で阻止させてもらおっかな？」

「！！ 誰！？」

リィラが一瞬で武器を抜いて構えた。

すでにあのふざけたような目はしていない。

武器は銃。

魔力を弾丸に射出する方式の魔銃だ。

赤とピンクという派手な色の魔銃を両手に持ち、いきなりの訪問者（相手からすればこちらの方が訪問者だろうが）に突きつける。

その距離、10メートル程。

撃てば一瞬もしないうちに心臓を貫くことができる。

フィーネも戦闘態勢に入っていた。

しかし、武器などは持たない。

魔力を効率良く変換するため媒介である、魔銃などの魔法武器の類はフィーネには必要ないし、ましてや魔力を扱う者に普通の武器はさらに意味がない。

魔法を使う者の中にも、ある程度のレベルに達すると媒介を必要としない者はいるが、フィーネは次元が違う。

自分自身が『媒介』であり、『武器』なのだから。

自分なりに最も動きやすいと思っている態勢で相手の出方を待つ。

眼は・・・ほんのりと、だが確かに、紅い。

「誰？ どうしてこんなところにいるの？」

訪問者・・・もとい、少年は軽く頭をかきながら、困ったように笑う。

「うーん、俺もよく分からないんだけどさ、ちょっと転移してみた
らたまたまこんなところに・・・来ちゃった？ って感じかなあ」

またうーん、と唸りながら、思い切り警戒心丸出しのフィーネ達を
見て言った。

「とりあえず、警戒は解いてくれない？ 別に危害を加えようなん
てこれっぽっちも思っていないし」

少年は右手の人差し指と親指で『これっぽっち』を表現する。

「ってか、おかしくないか？ なんてたまたま人に会っただけで
そんな警戒する？ まさかご丁寧に道行く人々皆にいちいち銃を向
けてる訳じゃないだろ？」

「場所が普通じゃない上に、状況も状況でしょう？」

リイラがもつともな指摘をするが、少年にはいまいちピンと来いていない様子だった。

「・・・？　ここって、なんかおかしいのか？　まあ確かに異常だが、こっちの世界じゃこれが普通なのかと・・・」

「うん？　なんて言ったの？　良く聞こえなかったけど？」

「あ、ああ、気にすんな。なんでもない」

「・・・あらそう。それよりあなた、ここがどこなのか分かってる？」

まさか会ったばかりの人にいきなり、異世界から来ましたー、なんて言うのも気が引けて、どう答えたものかと少年が首をひねっていると、フィーネが助け舟を出した・・・というより、核心をついてきた。

「君からは違和感とか矛盾しか感じないよ。本当はこの世界に存在するはずのない存在、とでも言えばいいのかな・・・」

「・・・はぁ？ 何言ってるのフィーネ？」

リイラが抗議の声をあげるも、フィーネは構わず続ける。

「この間感じた違和感と全く同じものを感じるの。リイなら分かってるでしょ、わたしの変な力。それに多分さっきの異常な揺らぎも、この人が色んな矛盾を抱えたまま、この森に転移によって無理やり入り込んだのが原因だと思う。この森が一瞬だけこの人の出現に驚いたんだけど、すぐさま『揺らぐ』ことによってその矛盾に、これも一瞬で対応した。だからさつき・・・」

「待て待て待て待て、その電波少女。・・・真偽は別とはいえ、こんな短時間で特に動揺もせずにならまで考えられるフィーネには正直尊敬さえ覚えるよ。でもだったら何？ 結局、この人はなんなの？」

リイラは頭が痛い、といった風に手を額に当て必死に状況を整理している。

「うんと、わたしの予想だけど、この人は多分・・・」

「待て待て待て待て、その美少女。勝手に話を進めるんじゃない

「！」

少年はあきれたように溜息をつく、あまりにもバレルのが早すぎるとはちらっと思ったが、ついに観念し、

「まったく、誰かさんの不思議能力のせいで予定が狂いまくりだ。なーんでこんな森に出たんだか……。せめて、自分の口から言わせてくれ。そっちの、フィーネ？ だかつて子はもう気付いてるんだろうけど」

もう一度盛大な溜息をつきながらも、少年ははっきりと告げる。

「お察しの通り超能力者です……。じゃなくて、まあお察しの通り、俺は異世界から来た。終結だよ。^{ヒイコ}まあとりあえずよろしく？」

リイラの驚愕も、フィーネの困惑も全部スルーしてこの少年……。結はさらに、そんなことを言っただけだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8998/>

最強の能力者

2010年10月14日20時31分発行